税金があるから日常がある

藤枝市立広幡中学校３年　　鈴木　光莉

先日、租税教室が学校で開かれ、今まで以上に税金について考えるようになった。

窓の外に目を移すと、公園から楽しそうな子どもの声やにぎやかな鳥たちの声が聞こえてくる。道路では、たくさんの車や自動車が通り、信号の色が赤から青へと変わろうとしている。近くには、道路のわきで、パトカーが交通違反をしていないか一日中見張っている姿が見える。などと、これら全て、私たちの変わらないいつもの日常は、税金を納める私たちが作り上げている。租税教室が開かれる前までは、こんなに、税金を納めることについて深く考えなかった。

この変わらないいつもの日常は、生まれたときから存在し、また税金を納めるという行為は人生の一部として、当たり前のように生活と密着している。そのため、税金を納める重要さ、大切さを忘れ、結果、この日常が当たり前と化してしまっていると私は考える。

私は、「この日常は決して、あたり前ではない」と強く主張したい。日常は私たちが、義務として税金を納めることで成り立っているのだ。だからこそ、私たちは、この日常の意味を理解し、決して忘れてはならないものだと思った。また、私たちの日常は私たちが作り上げているからこそ、私たちは自由に生きる権利や支え合う権利を持つのだと思う。

世の中は、支え合いの輪だ。税金を納めることで、私自身や、顔も名前も知らないあの子、あの人を救い、守ることができるかもしれない。人生に喜びを覚えることができるかもしれない。可能性は無限大だ。税理士の方が、言っていたように未来の私や人々に幸せが宿るかもしれない。税金は、運ぶことなく現在と未来どちらにも喜びの結果を残そうとしている。だから、今私たちにできることは感謝の意をもって税金を納めることだ。

今の時代、消費税が増税され、税金を納めることに不安を持つかもしれない。私もそうだった。けれど、租税教室を学び、考えが変わった。税金を納めることは、これからの人生の可能性の選択肢を増やすものであり、なにも損することではない。また、その可能性の選択肢を増やすのも、国民みんなで支え合い、負担し合うことができるため、一人だけではない。

けれど、近代の日本では、少子高齢化が問題視され、今後どのように費用を負担していくのか課題が上がっている。税金を納めることは、他人事などではない。国民一人一人が税金について考え、向き合っていく必要がある。

このように、税金を納めるということは、未来の私たちの生きる可能性の選択肢を増やし、支え合うことの重要さを実感するとともに、税金の問題に一人一人が向かい合おうとする意識を高められるものだと考えた。

私はこれから、日常の意味を忘れず、感謝の意をもって税金を納めていきたいと思う。